

2015.3.22 四旬節第五主日

## ギリシア人、イエスに会いに来る

ヨハネによる福音 12:20-33

さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上って来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた。彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。フィリポは行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、イエスに話した。イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる

今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。

## 説教

<さいしょに>

聖書のことばにはしばしばグサッと心に突き刺さることばがあります。多くの人々がグサッとくることばや、なぜだか私だけにグサッとくることばなどいろいろあるとおもいますが、きょうの福音の中で心に突き刺さることばといえば、「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ…」となります。「聖書と典礼」の表紙にはめずらしく福音朗読主題句としてこのヨハネ 12 章 24 節のことばが示されています。きょうの礼拝でも拝領唱のときもう一度この聖句を唱えます。

**一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯（ただ）一つにて在らん、もし死なば、多くの実を結ぶべし。（文語訳）**

新共同訳や新改訳では締まりがないといって文語訳を好む人もいるようで、どちらかといえばわたしも文語訳のほうに引かれるタイプです。好みの問題とっていいとおもうのですが、聖書のことばのある一節だけに焦点を合わせると文語訳のほうが重い感じ？重厚さがでるような気がします。

ところで、聖書はあることばだけ取り上げて事足れり、ただ一節だけの説明でわかるものでしょうか？大上段に構えましたが、ひらたくいえば、文語訳はやっぱりいいよなあ、ですむわけないよなあ、ってことです。

<二つの段落>

さて、きょうの福音テキストは新共同訳の区切り、見出しでは二つの段落となっています。

1. 「ギリシア人、イエスに会いに来る」が 20-26 節
2. 「人の子は上げられる」27-36 節

そのうえいま朗読した福音では 36 節まで続く段落を 33 節で区切りました。このせいなのか、いわゆる主題聖句である 12:24 「一粒の麦」が朗読の中で埋もれる印象をわたしは受けました。埋もれることで前後の関係が浮かび上

がり、その前後を読むことで、またかえって「一粒の麦…」が際立ってくるという受けとめ方ができるような気がします。

ところで、その前後には何が書いてあるのか。

「さて、祭りのとき…」と書き出しにある祭りとは過越祭のことです。

「何人かのギリシア人がいた」ここでいうギリシア人とはギリシャに住んでいるギリシア人のことを指すのではなくギリシア語を話す人たちのことをいっていると注釈にあります。つまり異邦人（ユダヤ人からみて）だということの意味するわけです。ギリシア語は地中海地方＝聖書の世界での共通語だったようです。その場所はローマ帝国の支配地域でもありローマのことばはラテン語なのに共通語はギリシア語というのも興味深いはなしです。ギリシア語は今でいえばアメリカ語（英語）のようなものかもしれません。わたしたち日本人は白人を見るとたいていアメリカ人と思いがちですが、当時のユダヤ人たちもひょっとしたら自分たちと違う人たち（異邦人）をなんでもかんでもギリシア人といっていたのかもしれない。

そのギリシア人たちがフィリポのところに来てイエスを紹介して欲しいとおそらくギリシア語で頼みます。そこでフィリポはアンデレのところに行く。アンデレはフィリポと連れ合ってイエスのところについてギリシア人の面会申し込みの件について話します。そこでイエスは「一粒の麦…」と答えます。

???ここからがきょうの福音朗読の疑問のはじまりです。

1. なんでイエスはギリシア人たちの面会申し込みに対してこのような独白で答えるのか？
2. 果たしてギリシア人たちはイエスに面会できたのか？
3. （チョット飛んで）イエスのモノローグの後に記述される天からの声を聞くそばにいた群衆とは誰のことを指しているのだろうか？
4. イエスのモノローグは群衆に向かってなされたものならば、ギリシア人

たちもその中にはいていたのか？

5. イエスは特定の面会を申し出た人たちだけに話されるのではなく、みことばを、父の栄光のしるし（雷のような天使の声のような）を示されたのか？ などなど

<情景を想いうかべる>

すいませんが、わたしもこの前後関係について、上手に説明できるようなことばがありません。ただ、わかったような気になる方法のヒントを得たような気がするのです。それをお伝えします。

きょうの福音朗読の箇所をショートムービーのように、または一枚の絵のように（何枚かでもいいです）自分の頭の中でイメージしてみてください。舞台は過越祭直前のエルサレム、ギリシア人たちが遠方からやってくる。彼らがフィリポに頼む、アンデレとフィリポはイエスのところにいく。イエスは「一粒の麦、自分の命を憎むものは永遠の命に至る、仕える者は従え、父よ、御名の栄光を現してください」と独白のように語る。すると大音量での天からの声。再びイエスのことば「わたしは地上から上げられる」

このような情景をイメージできれば、聖書のことば、福音が伝えようとしていることがわかってくるような気がするのです。

<さいごに>

四旬節ではイエスの過越を想います。

**「父よ、わたしをこの時のために救ってください」と言おうか** (12:27a)

この箇所はヨハネ福音書でのゲッセマネとも呼ばれます。イエスは十字架の惨めさを栄光の轟きへと変えました。ここに示された「イエスの過越」はわたしたちへの大きな励ましであり、イエスさまの招きです。

-----